「自分なんて」を「自分だから」に転換する

～山形県立寒河江高等学校～

取材・文／笹原 風花

山形県立寒河江高等学校の養護教諭・阿部芙佳先生は、保健室が居場所になっている生徒に寄り添い、カリキュラム外での生徒のマイプロジェクト（放課後探究）に伴走している。「マイプロは新しい保健室支援の手段の一つ」という阿部先生に、具体的な取り組みや活動への思いを伺った。

保健室で悩んでいる子を、元気にしたい！

保健室に来る生徒の多くは、なんらかの悩みや困りごとを抱えています。どうせ自分なんて…というネガティブな感情やしんどい、つらいという気持ちがあるなかで、こんな経験をしている自分だからできることがある、ということに気づいてほしくて、負のエネルギーを違う方向に転換できる瞬間があるはずなんです。そして、何かに打ち込みワクワクすることで、悩みの種は、なくならないとなくても相対的に小さくなります。その点でも、自分の興味・関心を起点にしたマイプロは、保健室支援の手法としても有効だと感じています。

すべての生徒に一律にマイプロを推奨するわけではない。生徒の悩み相談やちょっとした会話の中で、やりたいことや興味のあることが見えてくると、タイミングを見てマイプロの話をする。

「例えば、ある生徒（後出のMさん）は、勉強を頑張りすぎて体調を崩してしまうことがあり、落ち込んでいました。なぜそんな勉強を頑張りたいのかを尋ねると、行きたい大学があるっていうことでした。そこで、今は多種々人試方式があること、入試にもつながり得るマイプロという取り組みがあること、2年生の今だからこそ注力できることなどを伝えると、目を輝かせて、自分の経験から若い世代に献血の大切さを伝えたいと思っていたんです、と話してくれて。じゃあそのテーマでやってみようと、マイプロに取り組むことになりました。」

学校外とのつながりを大切に

マイプロに伴走するうえで阿部先生が大事にしているのが、生徒と地域の人とをつなぐこと。阿部先生自身、学生時代に勉強も部活もうまくいかなかったが、アルバイト先で自分の存在を認めてもらえたことで自信をもてるようになった経験あり、学校外とのつながりを大切にしているという。

「養護教諭としての仕事や地域の人との交流の場である"寒高カフェ"を通していろいろな人と出会う機会があり、この人なら高校生に伴走してくれそうだな、理解がありそうだなという方と積極的につながるようにしています。そして、一歩踏み出した活動をするときやプロジェクトに行き詰まったときなど、ここぞというときに生徒に紹介しています。紹介した人たちに人を紹介してもらうことも多く、ありがたいです。

生徒に紹介する際は、少しずつ大人への耐性をつけるという意味で、この人なら生徒を育定してくれる、褒めて伸ばしてくれると確信のもてる人や、生徒と年齢が近く共感しやすい人から声をかけるようにしています。生徒が悩んでいるときは、どういうかかわりや声掛けをすればいいか、私も悩みます。そういうときに学校外の人に話を聞いてもらうこともあり、私自身も支えてもらっています」

「生徒と向き合うときは、その子の気持ちがどこにあるのかを常に意識している」という阿部先生。生徒にも、「自分の気持ちが動く・誰かの気持ちを動かす」という視点をもつことを伝えてきた。

「マイプロの活動の根本にあるのは、誰かの意識や行動を変えたいという思いです。そして、気持ちが動かないと、人は動きません。ですから、自分の気持ちはどうなのか、誰の気持ちをどう動かしたいのか、そのためにはどうしたらいいのか…といった話をよくします。具体的には、あなたは今どういうことに悩んでいるのか、どういう伝え方をすれば相手に協力してもらえるか、答えたくなるアンケートを、参加したくなるワークショップにするにはどうしたらいいかな…などと問いかけるようにしています」

マイプロを自分を丸ごと肯定する機会に

前任校の山形県立小国高等学校でも生徒のマイプロに伴走し、「全国高等学校小規模校サミット」の開催などにも携わった阿部先生。「マイプロや地域活動を、勉強や部活動と同じような魅力ある活躍の場にしたい」と言う。

「私自身がそうだったように、勉強も部活動もイマイチの子が自信をもって生きていける、マイプロがそんな自己肯定の機会になるといいなと思います。自分勉って、ダメな自分も丸ごと肯定して強くなっていくものだと思うので、プロジェクトとして成果を出すという成功体験よりも、その子自身を育定することを大事にしています。育定というよりは、一緒に悩んだり、喜んだり、悔しがったりする共感に近いかもしれないですね。

また、マイプロに取り組むきっかけやモチベーションはそれぞれ違い、楽しそうだから、進路に役立ちそうだからと、他の子のマイプロに参画している生徒もいます。それぞれの生徒の気持ちの変化に寄り添うことも大切にしたいので、一人ひとりの言葉を覚えておいて、あのときの～さんの言葉が心に響いた、～さんが言っていた～って言葉は良かったよね…などと後から引き合いに出すこともあります。あまり言い過ぎちゃってもよくないので、慎しやすけどね」

養護教諭という立場や、授業としての探究とはまた違ったかたちで生徒に伴走する阿部先生。悩みを抱える生徒に寄り添い、内面を掘り下げることを通して、「自分だからできることがある、苦しみを経験したからこそもてる視点があるとも気づいてほしい。そして、ネガティブを側面も含めて自分を育定し、元気を取り戻してくれたら何よりもうれしい」と締め括った。

生徒インタビュー

Interview

寒河江高等学校2年生
M・Mさん

私にしかもてない視点で、誰かを助けたい

私はそこで献血の重要性を実感し、今はマイプロとして献血を広める活動に取り組んでいます。きっかけは、保健室で休んでいたときに、阿部先生からマイプロについて教わったこと。献血を広める活動をしたいと思っていたもののどうしたらいいかわからずモヤモヤしていたので、話を聞いたときに「これだ！やってみたい！」と思いました。

その後、保健室で昼食を食べていたメンバーが合流し、4人で取り組むことに。具体的なアクションとして、若年層へのアプローチに焦点をあて、献血についてのワークショップを開催することになりました。最初はなかなかイメージが湧かず何をやっていいかわからなかったのですが、探究系の学習塾の方、献血センターの方、日本赤十字社の方、社会福祉協議会の方、東北芸術工科大学の大学生など、阿部先生から外部の方々を紹介してもらい、たくさんの人の協力を得ながら企画を進めていきました。

活動するなかで、本質を見失いそうになることや、やるべきことが多くてしんどいことももあったのですが、その度に、阿部先生が軌道修正する言葉をかけてくれたり、『大変だよね、でもここを乗り越えればやりたいことができるよ』と背中を押してくれたりして、支えてくださいました。もう一つ印象に残っているのが、入院時に担任の先生がかけてくれた「この経験はあなたの武器になる」という言葉です。当時はショックの方が大きくなかなかそう思えなかったのですが、マイプロを通して、「闘病を経験したからこそ活かせる視点、私にしかない視点がある」という思いが強くなりました。さらに、その視点を活かせば、いろんな人を助けることもできるんじゃないかと思うようになり、赤十字社で働きたいという将来の夢も見えてきました。

山形県立寒河江高等学校

https://www.sagae-h.ed.jp

未来のイノベーター 付属高校プロジェクト

発行者：高等学校等教育部
https://forumprofessional.com
© 2023 教育機関向けコーポレートガバナンス研究フォーラム All Rights Reserved